宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

北垣外遺跡

1992年11月

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

2 2 2 2	ページ 罪 7 12 18 34 36	行 29 10 6 9 6	「北垣外遺跡」正談表 「装」 1994 第9号址 100m ナデ調製 後期3棟 大阪府両村	「正」 1992 第2号址 100cm ナデ調整 後期2棟 大阪府陶邑	

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

北垣外遺跡

1993年11月

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

H 1 1 1 1-

北项外遗路発掘調查委員長 長野県上伊那郡南箕輪村教育長 長谷部 石 郎

平成2年夏、地主有賀満氏より「住宅団地を造成したいので北堀外遺跡調査をしてほしい」との申し出がありました。

造成計画がはっきりした平成2年10月、県教育委員会指導主事市沢英利氏、日本考古学 協会会員林茂樹氏、村文化財専門委員唐沢勇氏、有質満氏に集まっていただき、協議の結 果、「まず対脳調査をし、その結果によって発掘調査の計画を立てて実施する」ことになり ました。

12月2・3日、林氏の指導で試験が行なわれ、住居跡・弥生・土師・陶器片が出土しま したので、関係者によって12月14日整議しました。その結果、記録保存のために調査する ことになりました。なお予算については原因者負担を基軸として行ないました。

発掘調査決定のあと、調査団長の林氏が病で長期入院となりましたので、急襲木下平八 昨氏に調査団長代理をお願いして進めることになりました。そして、木下氏指導のもと、 平成3年4月4日から調査が始まり、4月17日に発掘調査は終わりました。

今回関係者の努力によって、北型外遺跡の内容が明らかになり、報告書が出されること になったことは、大きな裏びであります。

北低外遺跡発掘開査及びその報告書の刊行当っては県教育委員会市沢英利指導主事、林 茂樹調査団長及び調査員、村文化財専門委員の方々、地主の有賀満氏、発船作業にご協力 くださった村内の方々及び村当局に、大変お世話になりました。わけても、木下平八郎額 査員には現場主任として報告書完成まで、一貫して中心になって尽力いただき感謝のほか はありません。ここに、各位に対して深甚なる敬意を表するとともに感謝申し上げる次第 でありませ。

ごあいさつ

土地所有者 南箕輪村北殿 有 賀

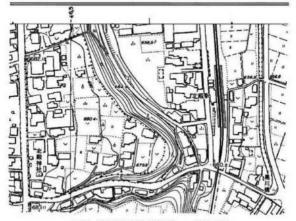
私が生まれ育った屋敷の北垣外は、天竜川の河岸段丘突端部の平面に位置する。

現在も、中河原の水田地帯が殿下に見下ろせ、古代の総作農業を中心とした頃の住居地として、最適の立地条件であったともうかがえる。この北坂外は、私が終戦後外地から引き揚げてきて、桑畑であったものを、果樹畑と水田につくり直し、耕作を続けてきた駅で表土には数々の土器の破片、石器が見つかり、その都度保存もし、又、果樹園の天地替え作業時では、住居跡とも思える炉石、灰、炭等も等間隔で見つかったりして驚きものである。江戸時代から明治時代であろうと思われる下水道処理場らしいものも1ヶ所で見つかっている。昭和30年頃に、当時南箕輪中学校の教諭であった、福沢総一郎先生(伊那市山寺在住)にはご指導にあずかり、振力私なりに保存をしてきたつもりであった。(平成1年 教育金昌会に 本が保保がなね)

今回の遺跡の発掘調査に当っては襲査団長の林茂樹先生、調査員の木下平八郎先生及び 村文化財専門委員、教育委員会の各位には、種々お世話になりました。末尾ながら輝くお 礼申し上げます。また、発漏調査によってもたらされた先祖の遺産が更に解き明かされて 後世に新り継がれて頂ければ誠に有難い枚第であります。

例 言

- この報告書は、長野県上伊那郡南箕輪村大字北殿所在の北垣外遺跡が、3643番地所有 者有賀瀬氏の住宅地造成事業により破壊されるため、原因者が遺跡の記録保存事業を 村教育委員会に委託して実施した発掘職套の報告書である。(下図680.4記号地点)
- 2. 本報告書の影修は林茂樹が行ない、編集は林・木下の協力で行なった。
- 3. 本報告書は発掘調査によって検出された遺構、遺物をより多く図示することにより資料提示に重点をおいた。文中図の指示を「第1図」の場合「図1」と表示してある。
- 4 清機の製剤は、投液基大部・木下平八郎が行かった。 締尺は各関に示してある。
- 5. 十器・石器の実剤、製団は木下平八郎が行なった。
- 6. 本報告書の執筆は、第1章、第V章は団長林茂樹、第1章、II章、IV章は木下平八郎 が担当した。及び実測図、写真、等記録保存原資料は南葉輪村教委に保管してある。
- 7. 写真撮影は、潰瘍、遺物共に木下平八郎が行なった。
- 8 出土油物は有智楽氏字に保管している。広く沃用されたい。



第2回 北垣外遺跡の地形 (1:2500) ……・・遺跡の範囲

目 次

ET L	DK	們其輻打板育委員教育货	安省	444	n.	斑
ごあ	いさつ		有	賀		满
91	言	3.				
H	*					1
挿図	目次・図版	目次				2
第I	章 遺跡の	環境				3
	第1節	位置及び地形・地質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・				3
	第2節	歷史的環境				3
第Ⅱ	章 遺跡保	護措置の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・				6
	第1節	遺跡保存についての協議及び措置経過				6
	第2節	保護体制				6
第Ⅲ	章 発掘網	長の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・				7
\$ IV	章 遺構・	8物	******		*****	8
	第1節	弥生時代の遺構・遺物				8
		1. 第1号住居址				8
		2. 第2号住居址				8
		3. 第 4 号住居址				10
		4. 第9号住居址				12
		5. 第9号覆土內遺物				12
	第2節	古墳時代及び平安時代の遺構・遺物				17
		1, 第3号住居址				17
		2. 第5号住居址				18
		3, 第7号住居址				19
		4. 第8号住居址				23
		5. 第6号住居址				27
		6. 第10号住居址				29
		7. 第1号堋立柱式建物址				29
		8. 遺構外出土遺物				32
		9. 土師器底部の糸切痕について				32
第V	章籍	括				34
		1. 弥生時代中期の集落について				34
		2. 古墳時代の竈神祭祀について				
		3. 古墳時代初頭の土器について				36

挿	図	H	太	2		版	B	次
第1図	北垣外遺跡	位置図・	4	図版1	逾助	近景…		40
第2図	北垣外遺跡	遺跡の地	形…例言下	図版2	第1	号住居	址	4
第3図	北垣外遺跡	発掘区全	测図 5	図版3	第1	号住居	址土器…	4
第4図	第1号住居	址実測区	9	図版4	第2	号住居	址及び土	254
第5図	第1号住居:	址土器托	影図10	図版5	第4	号住居	址	4
第6図	第1号住居:	址土器実	測図11	図版6	第1	• 4号	住居址土	354
第7図	第2号住居:	址実測区	13	図版7	第9	- 10号	住居址外	生土器…4
第8図	第2号住居:	址土器実	测図13	図版8	第3	号住居	址遺物出	土状况…4
第9図	第2号住居:	址土器托	影図13	図版9	扁円	簡形土	製品	4
第10回	第4号住居	址実測図	14	図版10	幕円	簡形土	製品(内	面)4
第11図	第4号住居:	址土器石	器実測図15	図版11	第3	号住居	址出土土	製5/
第12図	第4号住居:	址土器拓	影図15	図版12	第3	号住居	址出土土	8 5
第13図	第9・10号	住居址土	器拓影図16	國版13	第5	.7.	8号住居	址5
第14図	第9号住居	址実測図	17	図版14	第5	号住居	址	5
第15図	第3号住居:	吐力マド	実測図…19	図版15	第5	号住居	址土器…	54
第16図	第3号住居	址土器実	例図20	図版16	第3	. 5 .	10号住居	址遺物…58
第17回	第3号住居	址土器実	测図21	図版17	第6	号住居	址遺物…	56
第18回	第3号住居	址土器实	测図22	図版18	埋費	炉・第	1号建物	址57
第19図	第5・7・8号	住居址?	E测図 24	図版19	遺構	外出土	遺物	58
第20図	第5号住居	业土器 奥	測図25	國版20	土師	器調整	痕	5!
第21図	第7号住居	让遺物实	测図26	図版21	土飾	器調整	復	6
第22図	遗構外出土	意物実測	图30	國版22	土器	底部…		61
第23國	第10号住居	止実測図	27	図版23	青海	被紋を	線刻礫…	62
第24國	第9・10号住局	址土器石	器実測図30					
第25図	第6号住居	止実測図	28					
第26図	第6号住居:	业土器石	器実測図28					
第27团	第1号建物:	止実測図	31					
第28図	第1号建物:	土土器実	测图31					
第29回	遺構外出土:	上器石器	火 测図…33					

第1音 清跡の環境

第1第 位置及び始影・抽管 (第1回, 第2回)

北垣外遺跡は、上伊那郡南箕輪村大字北殿3644~3646番地に位置する。

交通上からは、JR・飯田線北殿駅舎接する西側の段丘崖上の耕地及び宅地一帯であっ

て、遺跡の範囲は、発掘地点を北端として南北350m、東西160m、約30,000㎡を測る。 この段丘を南殿段丘とよぶ(村誌)が地質学的には「新期十石流成殿面」と称され天衆

機関の上層部を形成し、段丘地形から見れば天竜川氾濫原より数えて二段目の段丘面である。 一段目の低位限には冷咳の少様形く傷力に終され、胆和垢の高となり比率10mを視る

南級設丘は、この位置で天竜川氾濫原に急騰に東方に突出し、実輪町木下附近で巾1.2km、 か鳥から北勢まで南北5kmの、広い氾濫原を形成する。これを実輪覆換帯と仮称する。

本遺跡は、実輸産地帯の最南端を望む設丘端に位置し歴史的な要地を占めている。 当連鉱地の地震は、至つの間の維健和ら成る

第1層 地表の鉄十層で覆さ25cm内外の単編会十

第Ⅱ層 里十層で厚さ50cm内外、摩堵十塩の維積したものである。

第Ⅲ届 不整合層で部分的である。程準の単金形十層で覆さ2m内外に推饋する。

第IV層 黄褐色粘土層で、厚さ80cm内外のテフラ層で信州ローム最上部のものである。

第V層 天竜機層で厚さ20m内外を割る。疑灰岩面機器を多く含むが円礫化が進んで おり、北影線庁の主導形は置である。

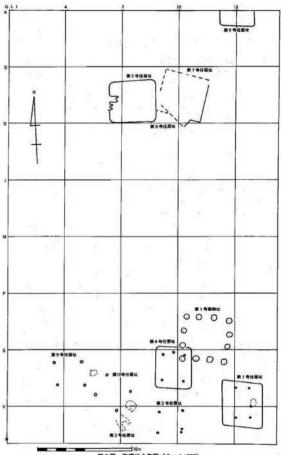
第11層の黒褐色泥硫層の根源は、弥生時代末期に西方の第11段丘 (神子葉段丘) 村営住 宅附近が大崩譲し、その泥液が第11層を形成した。第11層が遺物包含層であった。

第2節 歷史的環境

南箕輪村地域内には、遺跡が多く存在するので北垣外の周辺1㎞の範囲内で示す。(第1図)

- まず、遺跡直下に展開する天竜川氾濫原は、昭和20年代の水田造成時におびただしい 木製品土器。石器が出土した。箕輪水田遺跡地帯の南端である。この上の段丘面を占め る木遺跡は縄文時代以来、各時代に亘る大遺跡である。
- 北殿地区内の南殿段丘面には、秋葉社(縄文・弥生)・内城(縄文・古墳丘)・東垣 外(弥生・古墳)・西垣外(縄文・弥生・平安)が連続状策で分布する。
- 3. 北接する塩の井地区は、南殿設圧面はなく僅かな低位設丘と高位の御子集設丘が発達しており、この設圧面に次の遺跡が展開する。天伯(縄文・弥生・古墳・平安の各集落址)・垣外(縄文)・柴宮(縄文)・山の神(縄文・弥生)・東屋敷(縄文)・向垣外(縄文・弥生・古墳・平安の集落址)で、規模大きく密度が高い。
- 4. 北接する久保地区は、丸山古墳(子持勾玉・直刀出土)その他の数遺跡が密集している。





第3回 発掘地全瀬回 (S=1:200) - 5 -

第11章 遺跡保護措置の経緯

第1節 遺跡保存についての協議及び 措置終過

平成2年8月25日 土地所有者有賀濱氏より作字団倫開発に住い

調査依頼があった。

智圧会拍レナス

10月18日 市沢指導主事、林茂樹 氏、教育委員会に於て 協議。費用は原告者有

- # 11月14日 有賀氏、林氏、調査方に つき協議。真際局協議。
- # 12月1日 発搬地区、グリット設定、
- # 12月2日 爾吉研結成 試模開始。
- # 12月3日 23グリット調査終了。 弥生以降の遺構、遺物 出土。
- # 12月14日 調査団会職、記録保存 必要を決定。

平成3年4月4日 調査開始、表土剥ぎ。

- # 4月5日 試掘、グリット設定。 発掘作業開始。
- » 至4月12日 発掘作業終了。各遺構 測量。
- # 4月16日 有賀氏、調査団協議。
- " 4月17日 全体测量。調查終了。
- # 自4月25日~5月17日 遺物整理及 び顕査
- * 自5月7日~至5月15日 注記作業
- " 5月30日 調査団、事務局協議。

第2節 保護措置

有賀氏住宅団地計画区内は、やむを得ず、 記録保存措置とすることに決定した。次い で、急拠、北垣外遺跡発掘調査委員会を組 織して措置の執行に当たることになった。

委員長 長公部五郎 教育長

委 員 伊藤 亮平 文化財専門委員

唐沢 勇

日戸 武彦

唐沢 實

紅矢 藤朗

倉田 友雄 "

清水 一清 "

原 輝夫 "

事務局 長谷部五郎 教育長

丸山 博志 教育次長

藤沢 久人 社会教育係長

補山 文男 社会教育保

山崎 晴美 社会教育係

田中 整 公民館主事 松沢英太郎 社会教育主事(孫漢)

また、考古学学術経験者の協力を仰ぎ、 次の通りの北垣外遺跡発掘開査団を組織し、 登組顕素を推進した。

団 長 林 茂樹 日本考古学協会会員 調査員 木下平八郎 東洋陶磁学会員

> 小町屋 元 上伊那考古学会員 伊藤 和也 成城大学考古学専

> > 攻学生

補助員 文化財専門委員 8人 発掘調査協力者

薄田好美、藤沢千春、唐沢高美子、清水 浪子、宮垣津きい子、清水たけ子、出羽 沢三枝子、伊藤長子、唐沢美子、唐沢良 子、加藤貴美子、清水わかえ、加藤昭怡、 海沢昭卓

第川章 発掘調杏の概要

遺跡の水田表土を重機を用いて表土を剥ぐことにした。発掘対象面積は1,100㎡を測り、 南北4m東西25mの範囲に言る。(第3回)

開査区の北西の角をグリットの基点とし、軽速に沿って南方向にアルファベット、東方 南黒用数字を用い2×2mのグリットを設定した。第1 区は北に小道をはさんで満年 ち製焼、第1 区はA〜K、1〜15、第1区 区〜Y、1〜15、第1V区 A〜K、16〜32、第V 区 L〜Y、16〜33の5地区にわけた。今回の調査では、既に試園資産施済みの梨畑南側 の水田を発掘した。A、E、1、L、Q、U、Wの1,9,13、17,21,25,29とQ列は トレンチ掘とし土無観察用とした。(第3回)

発掘調査第1日 地層状態の確認と遺構の包含状態を探索した。

層位は、第1層耕土 (黒褐色土)、第1層耕土 (黒色土)、第10層黒褐色土 (混礫)、第1V 層黄色粘土 (ソフトローム)、第V層黒土 (黒灰色混礫) であることを確認した。

各グリットを任意のサンプルに運び貧難した結果、中世、平安時代、古墳時代、弥生時代に係る遺構10数基の存在を確認したので完細による調査を開始した。

第2日 発掘区の南東部8L、L1-13,U7,W7一帯に密集する遺構群,第1号址、 第2号址、第3号址の発掘に着手し、それぞれ遺物の出土を多く確認した。第3号址には カマド2基が併設されていた。或は他の住居址との重複と予想されたが確認できず課題を 後した。

第3日 前日に引きつづき精査を達めた結果、第1号址は外生時代中期の整穴式住居址、 第2号址は、戦後期の関田工事による接乱が及ぼされプラン規模は不詳、床面等秩序建構 出土の遺物により、弥生中期の住居址と判明した。第3号址は、同じく関田工事により遺 構の大部分は複乱が及ぼされていたが、僅かに西壁の一部及び床面とカマド琳2茎が残存 しており、床面上から遺物が螺旋状態で発見されたのは幸いであった。遺物の中に学会未 知見の大形漏円筒形土製品が検出され、調査団の関心を集めた。第3号址は古墳時代後期 の駅で式住民地と判明した。

第4日 第1号址より第3号址の位置に東接する第4号址、これより20mの位置、8L、 E6に存在が確かめられた第5号址、第6号址の発掘に着手する。第4号址は除生時代中 期の竪穴住居址、第5号址は古墳時代後期の竪穴住居址で、第3号址と同じ時期でカマド が同じく二基故設されていることが確認された。

第5日 第1号址と第3号址との間に換欠状態で確認された第9号址、第10号址の精査 にとりかかる。また第5号址を重複し切合関係で確認された第8号址およびこれと切り合 う第7号址の検査を進めた結果、第7号址は、カマドか2基、西盤に沿って並設され第3号整穴住居址と同時期の整穴式住居址と判明した。第9,第10号址は、開田工事による模 乱が基大で、プラン規模は不詳で、主穴の一部が確認されたに過ぎず、床面レベルから出 土した遺物により、第9号址は弥生中期の、第10号址は、平安時代後期の整穴式住居址と 判定された。

第7日 終日全遺構の全測に従事した。

以上で現場における発掘作業を終了した。

第Ⅳ章 造機・造物

第1節 弥生時代の遠様・連集

1. 第1号住居址 (第4. 5. 6図 図版2. 3)

GL U-13に検出された住屋址である。プランは南北方形に近くやや長い長方形で、規模は、東西4.3m 南北4.8m を拠る。壁高は水田造成時に上面が削り取られており、構築時の高さを測ることはできないが、東、南壁で4cm~14cm、西、北壁で15cm前後が程存しており、北側は各くない。

床而は、灰褐色十層を掘り込んで作られており、柔らかく生活而は不明確である。

柱穴は、4本で東西が壁より1.5m前後中心線に近く、南北は、南側が1.2m、1.2mを測り、料閉は、東西1.2m前後、南北2.8mで、振り込みは10cm~30cmと不揃いである。

炉は、東側の柱穴を結ぶ線上のほぼ中央にあり、60cm×80cmの楕円形状に残存しており 地床炉と考えられるが、焼土の削隅にかめの下半部が正位に置かれている。内部に小量の 灰と焼土が残っており、火種貯蔵の施設であろうか、本址の西3mにある第4号址にみら れる後期の盛行する理學板の先駆なすものかと表まられる。

東破の北隅と、中央やや南寄りに川原転石が壁に接して立てた状態で置かれている。北 西陸近くと、P4中央寄りに 1川 回転石がある他には何もない。

遺物(図5.6・図版2.3) 遺物の出土は少ない。甕と壺が主な器種である。

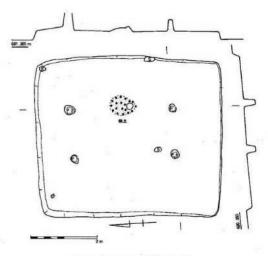
土器のみで石器の出土はない。夔 (図5) は口縁部に縄紋を施紋し頭節から胸部にかけ、郷状工具で簾状紋と彼状紋を、胴部から下半に沈線で綾杉紋を根み合す。壺 (図5、図版6) は、大形 (図6-1、図版3) のものは無紋で、脚下半部を欠く、表面は丁寧なヘラ仕上で、内面は剃毛状工具による調整で、焼成良好である。小形壺 (図6-3 図版3) は、口頸部と胴下半部を欠く、前面に米彩が施されており、刷軽最大部の位置に 4 (筒の突起があり、機成良好な壺である。壺 (図6-2、図版3) は、頸部のみで、頸部に三段の並行沈絡を入れ、その間を短線紋で生め、その下部に大振りの波状紋を置き、その波状紋の間を細かい液状の沈線で埋める。

埋要炉(図6-9、図版3)は、壁の低部から立ち上りの部分のもので、器面をヘラ調整 で仕上げた様成良好な土器である。遺物よりみて弥生中期終末の時期である。

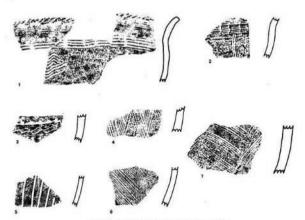
2. 第2号住居址 (図7. 図版4)

遺構 (図7·図版4)

本址は、GLW9に検出された住居址である。プランは水田造成時に上面を削り取られており東と南側は葬作で、西側は第3号住居址の床面と重複しておりプランの確認はむずかしい。床面は鞭まじりの黒褐色土で凸回があるが固く良好な状態の床面が住間に残存している。柱穴は5本検出されたが、東南のP3・P4は他の3本より小さく柱間が20cmと特定しており、姜湯の北側の4年次のありかたと違うようだ。関係P5の北側近くに50cm×70cm



第4回 第1号住居址実測図(S=1:60)



第5回 第1号住居址出土土器拓影(S=1:2)

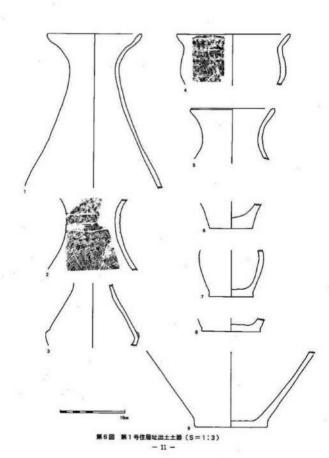
の楕円形状に焼土が残存しており、3箇の礫が三角形状に焼土の中に置かれている。炉と するには柱穴の近くであり不自然である。 連物の出土は少ない。

土器(図8-1) は完形土器が1点ある。台の上に小量の粘土を採り小形の器に仕上た チずくれ土器で、内外面共飛らっぽい調整で、内面は指先が器面から回転せずに離れた状 能がそのまま残っており、外面は凸凹がはげしく荒らっぽい仕上の土器である。台付小型 駅(図8-2)は、台部と立上りの1部分で上部は欠損している。器形のわかるものはこ の2点である。

(図9) の1は、器面に縄飲を全体に施紋し「状に沈線を重ね、ボタン貼付紋のあるもの、2は、簾状紋、3は、胴下半部の沈線の婚部、4は、第3号住居址と重なるとおもはれる位置からの出土で、口縁部に縄紋を施紋するもの、時期は、弥生中期未業で、下伊那の恒川式併行期である。

3. 第4号住居址 (図第10-12図・図版5・6-2・18-1図)

連構 (第10回) 本址はグリットT-9に検出された。プランは隅丸長方形で、規模は東 西4、4m×南北5mを測る。整高はこの住居址も水田造成時に削られており残存する壁 は5cm~12cmと高くない。



床面は砂質の黄色土で柔らかく生活面がとらえにくい。主柱穴は4本である。炉はP1・ P2の軸線上中央北壁舎りにあり甕の底部を打抜いたものが埋設されており内外に焼土が 飛る。 薄土のに 解納体粉げ込まれた離が数十億種なしていた。

遺物(図11・12・図版 $6-2\cdot 18-1$) 遺物の出土は少ない。(11-1) は埋棄がで検 出時には口縁部の1部が残っていたが埋設時にはほぼ光形に近いものであろう。口縁端部 に刻み目と縄紋を付けるものがある。(12-6) は第2号住居址出土(9-1) と同一紋様 である。石器(11-3) は磨製の環状石斧である。時期は弥生中期末葉と考えたい。

4. 第9号住居址 (図22·24-1·図版16-2, 3)

遺構(図14) 本址は、グリットT-4に検出された。調査区西にありレベルの一番高い 場所である。水田造成時に表土が90から100m位削られた場所で、柱穴と炉の火床が残った 仕屋せてある。

プランは不明である。主柱穴はP1・2・4・5の4本と考えられる。P3・6・7は この住居址に伴うものかは落ち込んでいる土砂の色にわずかの差がみられるので別の時期 としたい。

造成時に鋳土の移動による遺物の混在が認められ(図13)等にみられるように要の破片で、(弥生土器片恒川式新額に比定できる)が多く出土した。

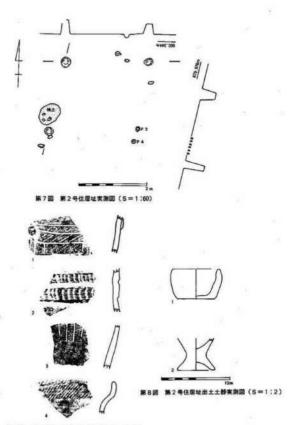
(図24-1)、図上復元できるものはこの3点だけである。この遺物もこの遺標に伴うか 断定できない。 (図版7-2・3)

5. 第9号覆土内遺物 (図13・14・29-1・2・図版7・18-1-3・19-4)

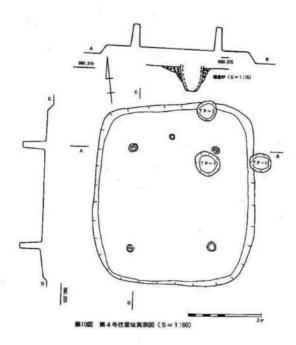
遺構については次項のところで説明する両住屋址共に調査区の西南隅近くにあり、第3 号・4号住居址に接近しており、調査区中では開田工事で最も削られた地区であり上面の 推乱がひどい場所である。

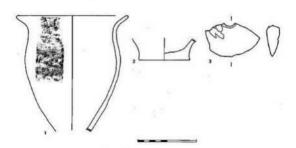
遺物 種土から弥生様式の土器片が出土した。(図13-1・2) は口端部に縄紋を施紋し その真下と頻節にボタン貼付紋のあるもの。(図7・8) は口縁部に縄杖を施紋するもの。 (10~15) は4本か6本の棚状工具による波状紋、短線紋、綾杉紋を開部に施紋するもの である。(3・4) は壷で3は後期に多く見受けられる壷の口縁部であろう。4 は類節である。

(図22-1-6) はグリット出土である。1は短線紋の土器で、口縁部内外に口総部に 向けて棒状工具で沈線が引いてある。この様な手法は数多い土器片の中でこの1点だけで ある。6は波状紋の機構な組合せの紋様である。(29-1・2) は共に瓊形土器で、図上復 元可能な土器片である。1は第4住と第10住の間に、横転した状態で片面を削り取られた 恰好で出土した。肩から胴部に掛けて様状工具で短線紋が属かれている。2は口縁部が大 きく外反する弱能から脚部に歩波紋が調がかれる。

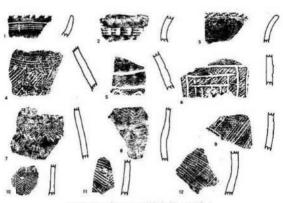


第9回 第2号住居址出土土磐拓影 (S=1:2)

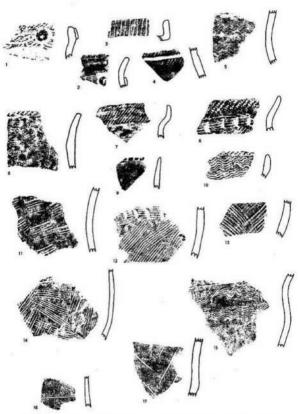




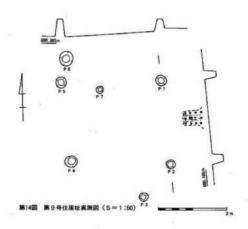
第11回 第4号住居址出土遗物 (S=1:3)



第12図 第4号住房址出土土器拓影 (S=1:2)



第13回 第9号住居址土器拓影 (1~5) 第10号住居址土器拓影 (6~17) (S=1:2)



第2節 古墳時代及び平安時代の遺標・遺物

1. 第3号住居址 (図15~18·図版8~12)

遺構 gL. W7に検出された整穴式住居址である。(図15)

改田工事で床面を残し、上層は撹乱され壁も削平された状態であったが、幸いにも西盤 にカマド址及び炉材、焼土が残存していた。ブラン、柱穴等は不明で、焼土部に炉の袖石 とおもわれる石が2箇ありその規模は1.5m×1.3mで、これをA号とし、1m間隔で北側 に並設された0.4m×0.7mの石と焼土塊のものをB号とした。

連物はカマドA号の前面と北側に土部器が頻集状態で多く検出され、南側床面に須恵器 杯蓋や須恵のハソウが模転した状態で出土し、かまど美口とおもわれ床面に肩円筒形土器 が上面を上にし出土した。(図16-1・図版8~10)

★集 (同16-18回。同居 Q~12)

適物の出土は上述のように形、質とも多かったが、まず特集したいのは「有孔原円簡形 土製品」(第16-1・関原10)である。斯面形は、縦7cm、模12cmの関係長方形(図16-1) を呈するが部分により長楕円形を呈する。長さ47.5cmを拠る土卸貨の筒形上製品で両幅は 切所状に顕整され、器壁は厚さ10cm~20cmを測る。外面と全周面が逸状工具による縦方向 のナデ洞製が加えられ、増部に指おさえ痕が残されている。主面と思われる原平な片面中 央部の中軸線に沿って487cmの円孔が4億、直列状に穿孔されている。

空月は極成前に加丁されたもので器跡を貫通している。

内面は粗製で、巾3 cm内外の粘土紐を輸積みして接続したままの状態 (図版10-3) で ある。用途は不明である。土部器では、甕8個、壷1側、坏2側、高杯1、甑1個 (図17・ 18-9・12) で、準は長順が多い。

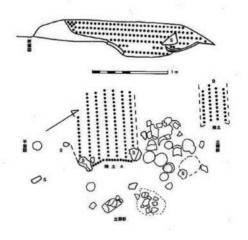
領恵器(図18-7~10)は4点あり、蓋杯とハソウがありカマドの前部床面から出土した。膝側は7世紀初頭前後と乗われる。

石器(図24-5・6)(図版16・6)は種土が出土した。5は蛇紋岩質の丁字頭勾玉の頭部 断片で、中央に径6 mmの孔をあけ、頭縁から両面に中央孔より放射状の不規則な沈線が刻 まれている。6は硬質の粘板岩の原石を打ち欠き棒状としたもので、部分的に磨かれてお カー10巻ケ帯に刃網による像が付いている。(21)は繊細?)

2. 第5号住居址 (図19・20・図版14~16)

連構は、グリットE-6に検出された住居域である。ブランは南北4.65m、東西もほぼ 同じ位の方形の住居域と考えられる。東側に第8号住居域があり、連物の出土状況もおおむれその範囲の中にある。壁は直に近く南壁で40cm前後、北壁で50cm前後を調る。床面は、小磯を多量に含んだ砂礫層を振込んでおり床面は整く縛らず非常に悪い、柱穴も不明である。かまどは西壁に2 基あり、南側が小さく規模は70×70cmで石組かまどである。内部よりかめの破片が出土した。「B号」とする。優外の煙出し近くに18×35cmの菱形の平石が置かれている。その右側にあるかまどは90×100cmの石組かまどで「A号」とする。内部にかめの破片が落ちこんでいる。遺物はかまと周辺に多い、東壁寄中央部に2ヶ所使土が残存する。石法数十個カマドの大小2 英の併設は注意すべき本象である。

遺物(図20・図版15・16-1) は多く、土師器變8箇、坏2箇、高坏1箇を敷えるが、須 恵器はなく、夔の量が卓越していることが注目される。變は大形品5箇、小型品4箇の割 合である。大形品は口縁の立ちあがりは直線状に大きくカーブし、口縁筋から急震に膨み、 最大市が中心に位置する器形を呈し、小型品は口縁の反りが少く脚のふくらみも少いのが 対照的である。(第20回、4~11)。高林は、脚の裾がわずかに広がる程度で。杯は底部場に 削りをめぐらせ、わずか高台状を形成する。(同図、1~3) いずれも伊那市鳥居田遺跡11 号任、駒ヶ根市中通り下14号位の出土品に類似し、信濃の古墳時代第V期終末、または奈 鳥時代加頭に比定でき場る。

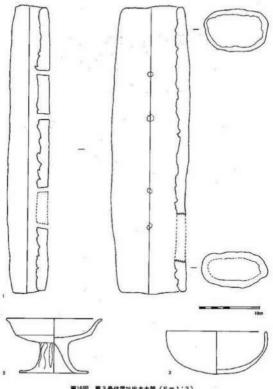


0 %

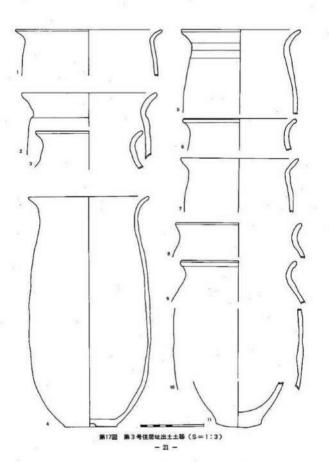
第15図 第3号住居址カマド址実測図

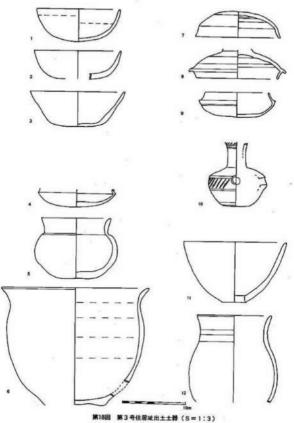
3. 第7号住居址 (図19・21 図版12)

遺物(図21) 出土量は少ない。土師の杯、甕の破片のみである。石器は2点あり、砥



第3号住居址出土土器 (S=1:3)





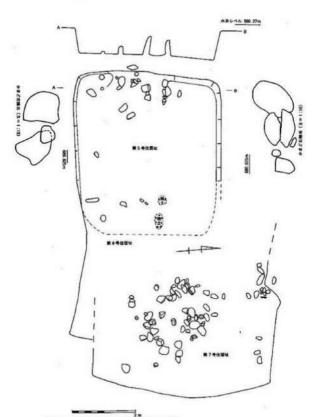
- 22 -

石(21·10)で、一部が競のように勢があり硬い石を使っている。スクレイパー(21図11) はチャアート製で縄文時代の運動である。

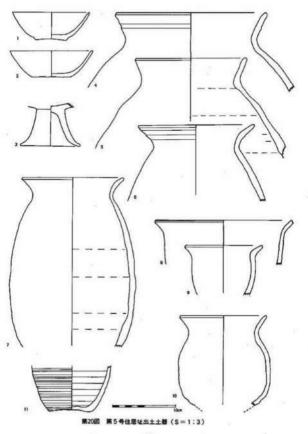
出土した土師器は、甕3個、杯6個 (第21図、図版第15) で須恵器は目当たらない。甕 大形長胴のもの2点 (第21図8、9) は、やや外傾する口縁が直線状で比較的に弱い。頗 部の膨みも弱いのが特徴と思われる。小型甕はこれに反して口繰外傾度も強く膨みも曲線 的である。杯は大形のもの2個、小型のもの4個であるが、前者は翌形に近く底部のみの 残欠色であるが、経10mの底面に木業痕の圧痕が印されており、祭祀用に用いられたもの と推定される。床面は一応整理された痕跡があり、多量の自然石が廃棄状態 (第19図、図 版13) であったのものが、カマド石芯用の石が遺されたものであろうか。古墳時代第V別 の新しい映製に担当する。

4 第8号件器計 (図19 図版13)

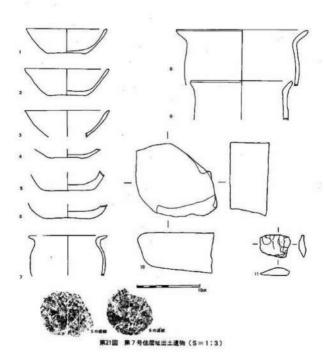
連構 本址は、第5号住居址と第7号住居址の中間、両住居址に重複して検出された。 プランは不明で、南東隅のコーナーの部分がわかるもので、床面は5号址、7号址と同一 面上にあるもので、小磯を多く含む無褐色砂礫層中に横築されており、生活面は整く飾っ ておらず増えにい。往穴等の施設は不明である。第5号址の東壁とおもわれる中央付近に 表る30×60mの施土は形態よりみてかまどの火床であろう。連物は殆ど見当らず時期決定 はむずかしいが、第5号址、第7号址よりは古いと思われる。



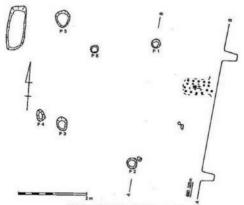
第19回 第5·7·8号住居址实测回 (S=1:60)



- 25 -



- 26 -



第23回 第10号住居址实测回 (S=1:60)

5. 第6号住居址 (図25・26 図版17・19-3・22-5・6)

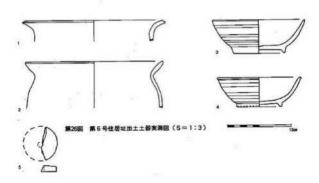
連構(図25 図版17-5) 本址は、グリットA-13に検出された。今回の調査では北端 にあり大半が用地外になる住居址で、プランは方形綱張りで、南壁は角から角まで3.4…を 勝り、東壁は1.7m、西壁の1.5mを調査した。この地区は土層の堆積の深いところで、連 構の保存状態は良い。壁高は東側で25cm、西側で29cm、南側で26cm、壁の状態は砂礫層を 組込んでおりよくない。床面も悪く振ればくずれて生活面の積度がむずかしい。かまどは 調査区外に存在が考えられる。往穴は3 箇検出された。

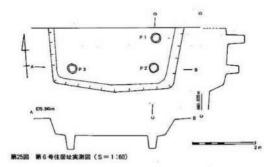
遺物は壁際に多く覆土中に弥生期の遺物が混在する。時期は10世紀である。

遺物 (図26 図版17・19-3、22-5・6) 土師器高台付稿(21-3)口径14.6~15.5cm、 高さ5.4cm、高台径8.1cm、高さ1cm、高台内は糸切り底である。内面内黒で焼成良好、甕(27-1・2) 共に口縁部である。

灰精鏡 (21-4) 口径13.4cm、高さ4.7cm、高台径7.3cm、高さ0.6cm、ヘラ切底である。 見込全面に液緑色の灰釉が刷毛で美しくかけられている葉投産の鏡である。

石製紡績車 (27-5 図版19・3) 砂岩製で外経は推定5.5cm、厚さ1cm、中央に径0.7cm 前後の孔がある。





6. 第10号住居址 (図23·24-2~6 図版16·4~7)

遺構 (図23) 本址はグリットU-7に検出された。戦後の改田工事により床面近く まで削られており、かまどの焼土とビットのみを残す住居址である。第3号住居址と重複 しており、かまどは同一方向に1m間隔をもって並んでいる。

この住居址もプランは不祥である。焼土の左右手前にあるP1・P2は主柱穴としては 位置的によいと考えられるが、他のP3~P6は不自然である。P5近くの長方形の土坑 は遺物が無く中の土砂もP1・2と違っており時期不明である。

遺物 (図24-2~6) 図版16-4~7) この住居址の遺物も各時期の遺物が混在している。

土師器は、(図24-2・3・4) がある。 2 は柱状高台付の杯 (重) で最近の出土例は、駒 ケ根市反目遺跡、第 2 号住地、伊那市鍛冶垣外遺跡第 4 号住等がある。共に11世紀末とさ れている。

(図版16・7) は優土から出土した白催の鉢の破片である。景徳鎮陶賞考古研究所の劉 新瀬氏のご教示によれば、南宋 (12~13世紀) 南方の鷹で焼かれた白磁である。胎土は柔 らかい感じで、ところどころに空間が目だつ、釉調は長い間土中にあった為か淡い黄色を 呈しており貫入がめだつ。

内面に片切彫の動花紋が施紋される。厚さは4mm前後を捌る。伊那谷で敷少ない出土例である。

7. 第1号編立柱式建物址 (図27·28 図版18-4)

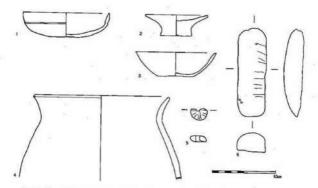
遺構 (図27 図版18-4)

本址は、グリットR-11の周辺に検出された。本調査の前に実施した試販の段階で、土 層観察のトレンチを設定、遺構の少ないと考えられるQ列を選んだ。調査上の理由からパッ クホーによる排土を行った結果掘り過ぎの状態となったが、柱穴の底の部分は残すことが できた。

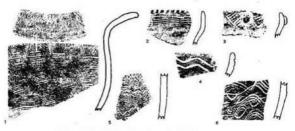
規模は、3間×3間で、1辺が柱穴の真から真まで4.6×4.7m割り】12柱穴で構成する 正方形プランの根立柱様式の建物址である。床面は砂質褐色土で柔らかく痕跡は認められない。

棚い方は径が50cmから70cmで、大きさに違いがあるがほぼ円形に掘り込まれており、深 さは南側の4本が60cm前後、北側の4本は90cmから100cmを測る。時期は7世紀末から8世 紀初頭と考えられる。

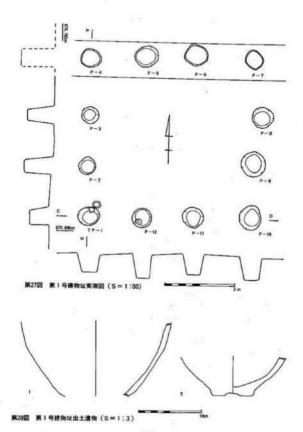
遺物 (図28) 甕の胴部の破片と、底部がP1・5・12から出土している。



第24回 第9号住居址(1)・第10号住居址(2~4)・第3号住居址(5.6)出土遺物



第22回 逮捕外出土遺物 (S=1:2) (グリット)



- 31 -

8 連續外出十清節 (図29-3~6 図版19-1・2)

(1) 十器 (図29-3・4 図版19-1・2)

灰釉鉢(図29-3)は水田の畦からの出土で、高台から立上りの部分で、口縁部に片口が 付くこれ鉄の底架である。

土師器畫(図29-4 図版9-1)この畫は、北に開接する梨煩より耕作中に出土した。 口縁部が欠損している。残存高は25cm、胴部最大径26cm、底部径は摩蔽がはげしく製作時 の径の計測はできないが7ca前後であろう。胴部に6.5×11cmの穴があいている。穴の状態 を観察すると、内面から外に向って力が加えられた状態が破砕面にみられ、穴が開けられ た後も使用された痕跡が認められる。(この臺は有質氏のところに今1点の磯と共に保管さ れている)

(2) 石器 (閏29-5・6)

石斧(図29-5・6) 2点出土している。耕作土を排土している時点で出土した。共に硬砂岩製の打石斧である。遺構に伴なわないので時期は不明である。縄紋後期土器片を伴った。

(3) 刻紋を有する機(図版23) 長径50m内外の砂岩質円盤状機の縁辺部に、孤の長さ 7 cm内外の青海波紋様を沈刻してある。発駆地点より20m北方の製畑耕作中に深さ40cmほどの土中から出土した。一定間隔をもって位置し、総数44箇が保管されている。土部器畫 (図版19) と岡地点か出土した。(発業者有智大急に動)

9. 土師器底部の糸切痕について (図版22-3)

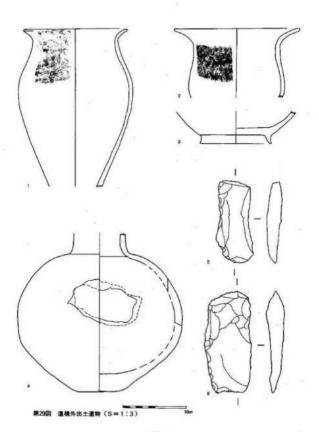
土師器成形終了時、糠種から切り離す時に使用する道具、即ち糸について土岐市在住の 今井経環夫先生に伺ったところ、お忙しい中にもかかわらず次のような御敷示を頂いた。

「横戸美養地方では、藁みご (にご) を作るのが古くからの習慣であったが、現在では このような藁みごを使用されている陶芸家はおらないとのこ、現在は織物の水糸を使用し ているようで、織物の糸では藁みごのように明確な糸切痕を示さないようです。

その糸の製作について、稿の徳をすぬいて、その茎の部分をさいて働りを掛けて作った ようで手輪輪による昼音成形が終るとこのような条作りがなくなるようです。

糸が乾くとこわく (かたく) なるので、木に浸して柔かくして使用する。織物と違って こわく (かたく)、したがって糸切に使用した場合実に鮮明な糸切痕が残るようです。

(文費 木下)



- 33 -

笛 V 音 総 括

北垣外遺跡の一部1100㎡(南北44m×東西25m)の全面を発掘した状況は、以上に詳述 した通りである。河岸段丘場の狭い範囲にかかわらず、4つの時代に営まれた住居跡が重 層的に存在し、各時代を通じ、重要な遺構、遺物が出土したことは、大遺跡北垣外のシン ボルとして、米山の一角を示すものである。幸いに東南部に耕地として残されている遺跡 はその中心があり、広範囲であることを直びとしたい。

今次の発掘調査で検出された遺構は総計11基。その大部分は整穴式住居址で10軒、高床 式倉庫1棟であった。

時代別に分けてみると、弥生時代中期4棟、古墳時代後期4棟、別に掲載柱式倉庫1棟、 平安時代後期3棟である。いわば古代の家の時代別展示場のようである。この地が古代人 の生活の場として、最適の条件を備えていることを示している。それは弥生時代以来、人々 の生産生活の基盤が米の生産であり輪づくりにあったからにほかならない。

北垣外遺跡は、北殿段丘の北端に位置し、殿下に広大な箕輪の天竜川沖積面を見おろす ことができる。弥生人はここに家を建て、服下の天竜川原の塩地帯を耕し、水田を経営した。弥生以来2000年間この党みは水薬に挙継して今日に至ったのである。

JR北殿駅の東から天竜川に至る水田の下には弥生時代以来、各時代の水田が積み重なって埋燥されている可能性は極めて高い。

1. 弥生時代中期の遺跡について

弥生時代中期集落の発見は、上伊那初の事例である。弥生式文化とは、とりもなおさず 木稲農耕の生活文化であるが上伊那への波及は他の地域に比べ今まで確実に把握されてい なかった。

即ち、弥生文化は、紀元前500年頃、北九州の一角に発祥し、次第に東方へ被及し、近畿 の各地、そして濃尾平野に定着し、更にここを基地にして中部山岳地帯や関東に拡散して いくのである。長野県城では、天竜川沿岸を北上し、いち早く伊那谷南部に定着する。

第一被は適尾の条痕文系士器や、東海の遠賀川系士器を使った人々の移住によってもた らされ定着した。その跡は南保護村や衛木村阿島の遺跡に見出される。また著しく条痕文 系の色彩の強い際王式系の士器は上伊那にも足跡を残している。それが駒ケ根市荒神沢遺 跡である。

第二波として、連賀川式系と水神平式を併せ持つ林里式土器(下伊那郡豊丘村)を持つ 文化が上伊那郡中川村の刈谷原連跡に流入し定着する。

第三族の岩滑式文化は上伊那を通過して岡谷市の諏訪游畔で発展する。これが有名な庄

の個式十器文化で、同類遺跡から皆身を出土しており注目される。

このような情勢の中で、弥生中期後半の時期になると、前途の阿島式土器やこれから派生した北原式文化 が 酸田以北で発祥するが上伊那の地には北適せず、いわば第三波、第四海ともに上伊那は空白地帯と目されてきた。

ところが今回の調査で土器を伴って住居址群が発見されたことは既成の概念を覆すもの でこの点まことに意識深いのがある。整穴式住居跡は4軒だが、残念ながら戦後の開田工 事により、撹乱、破壊が及ぼされ、第1号址と第4号址のみその被害か6免れ、住居構造 の大要を知ることができる。この住居址は、発調区の南半部に頻集し、北側に疎が振られ ており環境書をと思われる。北原式土器を伴う第1号址(図版2、3 図4、5)は、一 7148mのカ形に近く 原柱なで事業中よる際と想象の状態があられたみの初期を示す。

恒川式土器を伴出した第4号址は長輪4.3mの小型長方形を呈し四柱穴で、中央北等りに 埋撃炉が設けられていた。(図10.11.12. 図底6-2.18-1)。

第1号並出土の土間は、産、甕、腰鉢、高杯残鉢(図版3)、ミニチュア土器2点を伴い、 計13点を数える。細口壺、小形台付壺には朱彩を施したものがあり、施文は、回転縄文、 傷害き沈線文、機器さによる短線文、斜線文、移域文が肩部、口縁部、口唇部に施される (図版6の下)、開館全面に縄文や地文にへう描沈線文によるコの字重ね文様を施す、台付 甕(図8、図版4)がある。また赤色盤彩の壺や腹潜沈線文、農伏文が施された甕が多い。 またこれとは別で第9号第10号住居址出土の土器のように胴部に沈線の綾杉文や口縁に 縄文奈がつけられ、横走する藤状文や細い郷線数状文が確行する1群(図版7、図11、12)

これは恒川式古式に類似しているが、また一面天王垣外式や海戸系の要素を持ち、両者の影響を受けた土器と思われる。以上の住居址群は、同類住居址の最北部を示しており、これに引き続いて南接する地籍に集落の中心部が存在すると見られる。今後の探査を期待したい。上伊孤地域の縄文から弥生への変革を物語る極めて重要な遺跡と思われる。

2. 古墳時代の裏神祭祀について

がある。

古墳時代の後期の屋内祭祀跡は学界初見の例である。戦後期の開田工事により包含層を 模乱された第3号住居址は、率いにも西壁に造りつけられた石芯粘土製の魔 (以下 カマ ドと記す)が残され、禁口手前の床面から壁にかけて20数個の土師器が蝟集状態で出土し た。(図版8-1~5) 器種別に記すと、接口手前に戸円筒形土製品、その右にエボシ形、 その首側依りに整8側、差1個、41個、施2個、高坏1個、(図版9・12-、1、4) 須恵 器の蓋付环3個、坏1個、ハソウ1個、(図18 図版19-5、6、7、8)、優土中から石製包 玉であった。出土した土師器、須恵器共に古墳時代第V期末の所産である。

土師器の中にある長嗣のエボシ形墜等は、伝統的な短嗣形のものを加え墜8個の頻集状 態で、古事記のヤマタノオロチの条の面八槽を想わせ、祭祀状況を表わすものと考えられ、 加えて石製模造品に近い蛇紋岩様石質を加工した勾玉。須恵のハソウ、蓋付坯、土師の飯 等は祭器としての性格が強いことからみて祭祀遺構として良いであろう。就中、カマド美口前から出土した扁円筒形土製品は(図10 図版11)、長さ47.5cm円橋の長径13cm、短径7 cmを捌る。程原11m。片面の中輪線の中央部に径7mmの穴が4箇直列して穿れ、表面はヘラ糠きが施されるが、内面は輪積みのままで僅かに調整痕が認められる程度である。金面水褐色を呈し、焼成は良好である。同額品は全国的に見てその出土数は稀少であり、僅かた大阪府衛門遺跡出土の10数点が知られ、その他奈良県、和歌山県等に単品で出土している。但し本品のように穿孔は認められず。全く無孔である点が異なる。表面の中輪線に沿って直列する4箇の孔は、祭祀の際に書串を模立させるためのものと考えられる。特にカマドの神として古くは延喜式第八に記載される京都府平野神社はカマド沖奉祭の官営社として知られるが四座(今木神、久度神、古関神、比光神)で四神を祀る。本品の4孔は四神の着事の孔と想定することが使定されるのである。現代においても、第02年新郎に置かれたものであることが検定されるのである。現代においての「湯立神楽」のカマドは美口の天井部に配置が入れたものであることが検定されるのである。現代においての「湯立神楽」のカマドは美口の天井部に結り地を置き着物を横てる事頃があり、類似の方法と思われるのである。

また、本県におけるカマド出土例は1000個体を超えるが、いわゆる韓カマドは優かに3 何であり皆無に等しい。この点、機内を中心とする西日本各県における出土数と比較する 時、大きな格差を示している。この格差が7世紀以前における格差であるとすればカマド を伝来した渡来人の出自の差によるものと考えられる。積石塚古墳群の療滅の如何を問う 問題と共に信養の古墳文化の底拠を把握する上に乗ぎな問題であろう。

また第3号住居址、第5号住居址に見られるカマド双設は、株カマド出土皆無の現象に 対応する現象であり、平野神社祭神に見られる久度神、古関神祭祀を意味するものと思わ れるが今後の研究に持ちたい。また第7号址は麻痺前に奉摘されているが回腹と思える。

ついでに、平安時代住居址の存在にも触れておきたい。第6号住居址、第10号住居址は 平安時代後期の住居址である。第3、第5、第7号住居址のように7世紀初頭の集席に比 べその大きさを拡大したようである。また南宋製白磁鉢の発見は破片ながら北殿のルーツ としての「殿村」とよばれた中世大ムラの文化的経済的高さ示し「飯坊」信仰圏の一翼を 担っていたことを示す遺跡として、歴史的文化史的にその価値は極めて高いものがあり、 今後村行政に対ける文化財保護の立地からの施管に駆峙することが大きい。

3. 古墳時代初頭の土器について

古墳時代古式土師器出土についてである。

令次発掘調査地点の北方30mの地籍に位置する有質氏栽培の祭園の耕作中に出土し採集 された憲形土器が同家に保存されていた。加えて同じ出土地点から径40cm内外の平石44点 が採集保管されているが、壷の原位置と平石群の関係は同位置であったとの耕作者の証言 がある。

この土器 (図29-4. 図版19-1) は、脚部は球形 (径26cm) を呈し、頭部は径8cmの

細形であるが立ち上りから折榻していて口臓部器形は不祥であるが恐らくS字状口臓にり 飾られたいわゆるパレススタイルの壷形土器であろう。器面に施文はないが、平滑に磨か れた製体全面に失業が施されており、やや単化しているがその機病が認められる。恐らく 当時、関西または東海方面から搬入されたもので、その路線は古東山道の神坂峠越えによっ てこの地にもたらされたものと推定される。松本平ではこの時、県内最古の大型古墳、弘 法由古墳が築造されており、初期古墳文化の信濃への彼及は明確である。同類土器は、伊 配谷では毎田市廃光寺の恒川遺跡から出土しており、弥生時代遺跡の体格が北坂外と対比 し得ることと併せて重要な研究課題を提供している。

またこの土器の胴部破損は意識的な穿孔加工で、人面を表現し呪性の機能を持つと推定 される。前述のように出土の安山岩製平石44個の存在は注目すべきことである。出土状態 は耕作中の漸時発見であるが、およそ10m平方の範囲に一定の開闢で配置されていたとい 5.

集積状態ではなく、配置状態であり、一種の配石遺構と思われる。その中に3点である が、縁辺部に残いレリーフによって青海波文を描き出したもの(図版23)があり、祭器ま たは呪性が感じられる。施文された自然石(河原石)の配石遺構とすれば、古代祭祀の「磐 座」(いわくら)となり、朱彩壷形土器は降臨した神への捧げものとなる。

農耕民の祭祀として輜重を祀るのが通例であるので、このような推定が可能である。い ずれにしても上伊那地域への古墳文化の浸透ぶりを示す極めて貴重な土器である。同類の 遺構が近くに埋存する可能性が高い。

末尾ながら本稿を了わるに当たり、原円値形十製品の出土倒等について御教示を賜った 奈良大学教授水野正好先生、本遺跡の顕査に多大の予算を負担された地主の有賀満氏およ び記録保存事業について指導された県教育委員会文化課市沢指導主事、村教育委員会社会 教育課松沢英太郎主事をはじめ村文化財保護行政関係各位に深く謝意を表す次第である。

	(調査団団共 界 の	之栖)
[注]		
(1)	駒ケ根市教育委員会「荒神沢遺跡」	
(2)	太田保「中川村刈谷原遺跡の一括出土土器について」長野県孝古学会誌10	1971
(3)	神村透他「北原遺跡」	1972
(4)	官沢恒之「飯田市復川遺跡」長野県幸古学会誌所収	1972
(5)	桐原 健「点描、信濃の古代」信毎書籍	1992
(6)	中村 浩、他「原山古墓群の調査」「陶邑VII」大阪府教育委員会所収	1990
(7)	片町国直、他「霧月祭」南信濃村村史遠山所収	1976
(8)	水野正好「竈形一 日本古代竈神の周辺」古代研究24号所収	1982
(9)	宮板光昭「千鹿頭社IV」 諏訪市教育委員会	1991



図 版



遺跡近景 南方より



遺跡近景下段 南方より



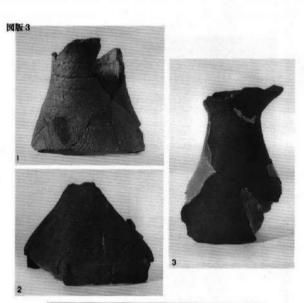
奎出土状況



炉址

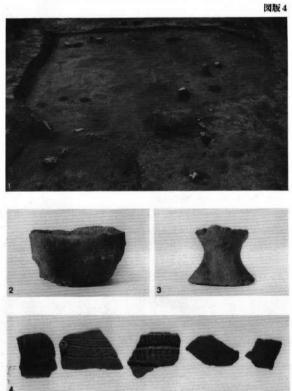


第1号住居址全景 西方より





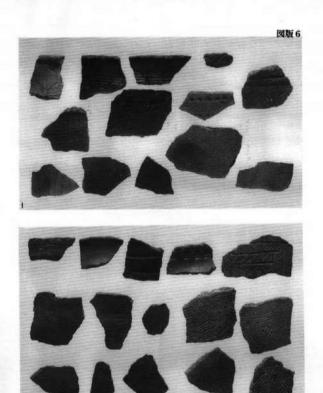
第1号住居址出土土器



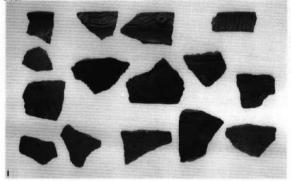
1. 第2号住居址 (上) 東方より(下)出土土器

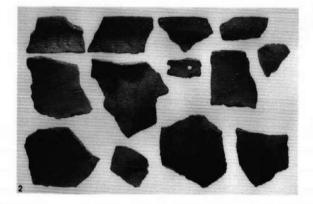


1. 第4号住居址 北方より 4. 石器出土状况



1. 第1号住居址覆土出土 2. 第4号住居址覆土出土



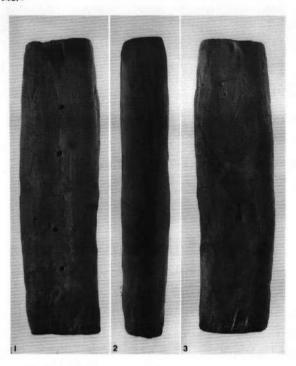


1. 第9号住居址上面出土弥生土器片

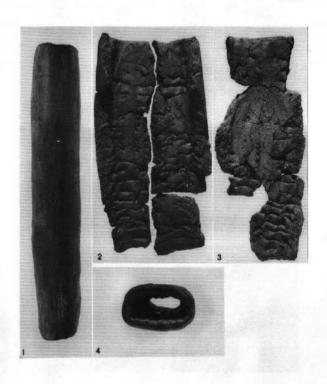
2. 第10号住居址上面出土弥生土器片



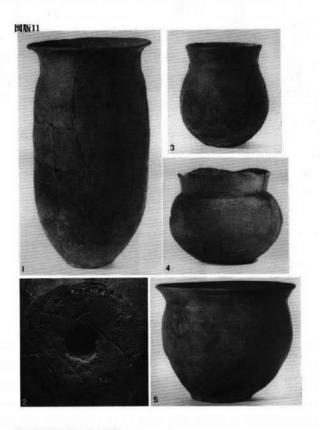
第3号住展址出土状況 1.カマド前部 2.美口 3.顧円飾影土製品出土状況 4.カマド左床面 5.須恵器ソウ出土状況



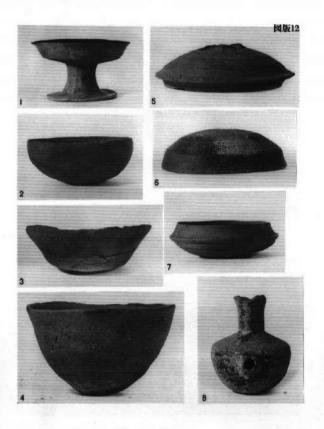
第3号住居址出土羅門簡影土製品



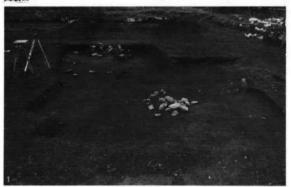
第3号住居址出土扁円筒形土製品 1. 侧 面 2.3. 内 面 4. 閉口部



第3号住居址出土土器 2.1の底部



第3号住居址出土土籍 1~4. 土師器 5~8. 須惠器





1. 第5・7・8号住居址 東方から 2. 第7・8号住居址投げ込み礫

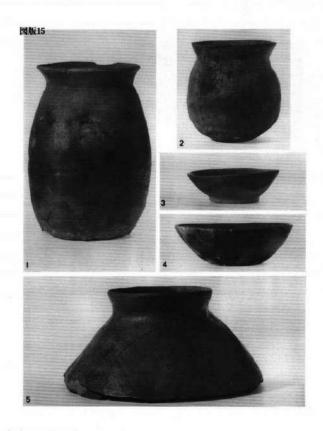


第5号住属址発掘状況 1.カマド並列出土状況 5.B号カマド址焚口部

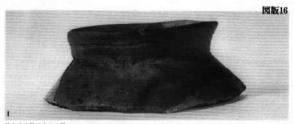
2. A号カマド址

3. B号カマド址側面

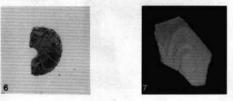
4. B号カマド址土器出土状況



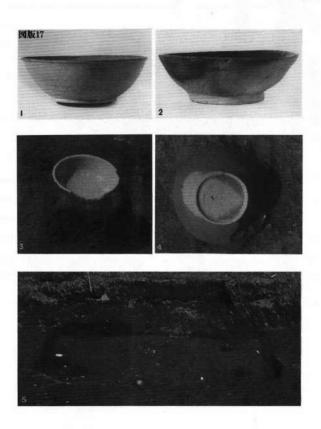
第5号住居址出土土器



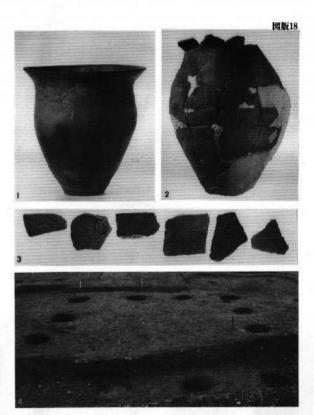




6.7 第3号住居址上面出土遺物

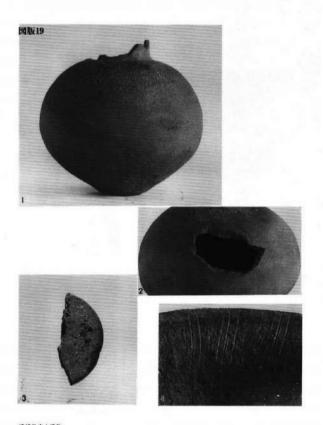


第6号住居址遗物

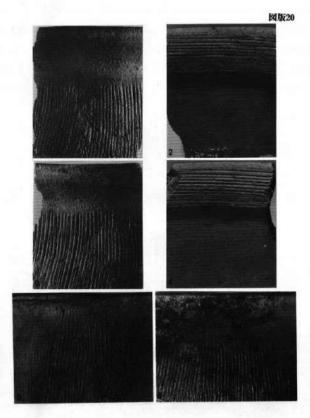


1. 第4号住居址理**変**炉 2. T-7グリット出土 3. 各グリット出土弥生式土器片

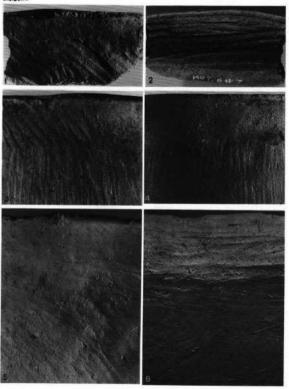
4. 第1号堀立柱建物址 北方より



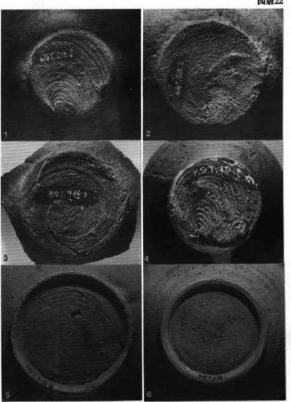
連線外出土連物 1.2. 調査区隣接地区出土土器 3.第6号住居址上層出土紡錘車 4.グリット出土弥生土器口縁部内側



北塩外出土かめ調整家 2.4. 内面

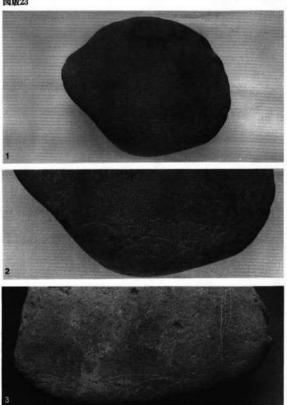


北垣外出土かめ調整痕 2.6. 内面



1~5. 土肺器底部 6. 灰輪·高台

國版23



青海波文線刺聯(19図版土師器と共に出土。3は長さ32cm)

北垣外遺跡

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘 調查報告書

平成4年11月 発行

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会 印 劇 開小松総合印刷

